

**タコシマ 蝸島** 珠洲郡正院郷に屬する部落。能登名跡志に、『蝸島村は筆津より二十町あり。家數四百軒あり。近郷の獵場にて、四十物其他問屋あり。昔此沖に大なる蝸あり。船中又は往來の人を取る。此山の山神と戦ひ、終に山神平げ給ふにより、今氏神山王權現是なり。其蝸化して島と成る。今辨財天の宮ありて、磯三四町に在り。依つて蝸島の名あり。』といひ、文化の郡方書上には、『蝸島村の島に蝸多く居申故、村名も右島をかた取、蝸島村と唱へ申由。唯今は右島を蝸島の島とまで唱へ申。』と記する。

**タコシマ 田子島** 能美郡山上郷に屬する部落。

**タコシマ 田子島** 石川郡湯涌郷に屬する部落。越登賀三州志故墟考に、賊魁蝸島半介この村にあつたが、佐久間盛政之を懐けて、刀利左衛門の御神造山の堡を陥したとある。

**タコシマコウ 蝸島港** 珠洲郡蝸島の西、正院の東南なる海面をいふ。南に辨天島を控へてゐる。

**タコシマジョウ 田子島城** 石川郡田子島に在つた。越登賀三州志故墟考に、賊將宇野次郎右衛門ここに住したといふが傳がない。その第跡・調馬場といふ地も、口碑はあるが茫然として明らかでないとある。

**タコシマシン 田子島新** 能美郡山上郷に屬する部落。興九郎島新と共に總稱して出合島といひ、石川郡の運上島と入會になつて居たから、明治廿四年之を石川郡の地籍に移し、凡べて出合島といふことにした。

**タコシマユウザエモン** 多胡十左衛門 初めて前田綱紀に仕へて三百石を領し、貞享三年

歿。子孫相繼いで藩に仕へる。  
**タゴツヤマ** 多子津山 石川郡大門山と月原山との間に在る山。高さ一二七二米。地質石英粗面岩。

**タザイウチ** 太盛氏 織田信長の臣平手政秀は中務大輔と稱したが、その主の無道を諫めて切腹した。二代監物汎秀亦信長に仕へ、三方原の役に徳川家康の軍を救うて戦歿した。三代秀吉の時織田氏滅び、後金澤に移住し、その子言親は横山氏に仕へた。言親の季子言辰は烟族太宰謙翁の家を嗣ぎ、後去つて信濃飯田侯頼氏に仕へた。言辰に三子あつたが、長重光は癡疾によつて僧となり、次子純は延寶八年九月飯田に生まれ、元祿元年九月父と共に江戸に移つた。純は即ち春蟻である。世に春蟻の加賀に縁故ある如くに言ふものはこの故である。

**タザキガハ** 田崎川 ↓タケナカガハ 竹中川。  
**タジカハチマンジンジャ** 田鹿八幡神社 ↓タヂカハチマンジンジャ 田近八幡神社。  
**タジリ** 田尻 江沼郡北濱に屬する部落。加越調評記の天文廿一年七月朝倉宗滴が加賀に出馬した條に、『小塩・橋立・湯山津・田尻の浦に燒籠は、漁舟にとほするざり火の浪を燒くかとおやまたる。』とある。

**タジリガハ** 田尻川 江沼郡高尾から出て、田尻を通り、日本海に注ぐ。長さ約三軒餘。  
**タジリシゲウチ** 田尻重氏 通稱七右衛門。寛文十年初めて百五十石を以て召出され、元祿十六年歿。子喜太夫繼ぎ、亂心して断絶した。

**タジリシゲタケ** 田尻重武 通稱宅丞・彌次右衛門。七右衛門重氏の子で、重氏の妹にして年寄女中であつた岸野の後を立て、祿増して四百石に至つた。元祿二年大小將から表小將を經、奥小將横目に至り、寶永八年免ぜられた。子孫相繼いで藩に仕へる。

**タシロ** 田代 鳳至郡當目の内の小字。  
**タシロ** 田代 珠洲郡木郎郷に屬する部落。  
**タスケゴヤ** 助小屋 石川郡笠澤に在つた加賀藩の窮民收容所は、之を非人小屋といふことが普通であるが、亦助小屋と呼ぶこともあつた。天保九年の飢饉の際には、その外所々にお助小屋が設けられた。綿津屋政右衛門日記に、『笠澤村には御助け小屋前々より有之外に、また御小屋建ちたり。其外川上芝居跡・妙義芝居小屋跡・天神町・昌安町・淺野町、この五ヶ所は此時新に相建ち、右の御助小屋へ何萬人といふ人々はひり候。』とある。

**タダ** 多田 河北郡英田郷に屬する部落。  
**タダゲンスケ** 多田玄介 鳳至郡鶴川の人。字は士龍、號は蘭洲學海・文淵。童名喜五郎、後源介・玄介と改めた。寛延元年金澤鏡屋十二郎の養子となつたが、寶曆三年離縁の後影城百川の門に入り、書を善くし、又篆刻に妙を得、十年横山山城守に仕へて秩祿十人扶持を受けた。性豪放磊落。明和四年藩侯前田重政其の居室に猿圖を作らせたが、殿中に登るに日々髪を結び袴を着ける煩あるを愛へ、筆を執ること一日、脱走して攝津に走り、有馬温泉に醫師となり、傍ら子弟に讀書・書畫を教へた。天明八年五月十二日五十七歳を以て歿し、蘭洲士龍と諡せられた。

**タタゴウ** 直郷 珠洲郡に屬し、藩政時代では宗玄・鶴島・黒丸・鶴岡・蟹ヶ谷・鳥越・下島越・金峰寺・法住寺・廣國・西方寺・馬渡・大町泥木・寺社・南方・北方の十六ヶ村を含んでゐた。

**タタシユウヘイ** 多田周平 鳳至郡鶴川の人。諱は齊村、字は士禮、號は麥淵又は青華樓。寶曆元年京に出で、醫を山脇東洋に學び、四年江戸に移り、三浦瓶山に經時を受けた。又建部涼岱に俳諧を學び、六年武藏育梅に寓して刀圭を業とし、屢近國に行脚して桃八仙集を著した。八年歸郷し、その翌年より金澤象眼町に出でて醫を營み、安永三年再び歸郷して老を養ひ、文化元年五月廿八日七十九歳を以て歿。

**タタジロザエモン** 多田次郎左衛門 初めて前田利長に仕へて五百石を領した。子孫相繼いで藩に仕へる。

**タタジンジャ** 多太神社 (一)沿革 能美郡小松上本折町に鎮座する。式内等舊社記に、『多太神社。式内一座。板津郷小松鎮座。今稱多太八幡。或云祭神太田々根子命。今爲繼體天皇。以八幡大神爲相殿。稱多太八幡宮。』と稱するものである。朝野群載の康和五年六月十日奏狀に、『神祇官御體御卜奏。坐加賀國菅生神多太神云々。』平家物語藤原合戦の條の『木曾殿やがてそにて諸社へ神領を寄せらる。多田の八幡へは蟻屋庄云々。』石清水文書應永十八年閏十月十四日附足利義持判書に、『石清水八幡宮寺多太社』などといふもの、皆本社にかゝるものである。

四年五月十九日綱光在判の寄進狀に、若山庄直郷とあるから、當時は若山庄の一部であつたと見える。

四年五月十九日綱光在判の寄進狀に、若山庄直郷とあるから、當時は若山庄の一部であつたと見える。

四年五月十九日綱光在判の寄進狀に、若山庄直郷とあるから、當時は若山庄の一部であつたと見える。